

## 生殖可能期間が短いと心不全の発症リスクが高まる

内因性性ホルモンへの曝露を反映する生殖因子は、心臓のリモデリングと心不全の発症に影響を及ぼす可能性が示唆されている。本研究では、女性 28,516 例を対象に生殖因子と心不全の発症との関連について検討した。

1993～1998 年の試験開始時に、生児出産数、初回妊娠年齢、生殖可能期間（初潮から閉経までの期間）といった生殖因子について自己申告により調査した。被験者の試験開始時の平均年齢は 62.7 歳であった。平均 13.1 年の追跡の結果、1,494 例（5.2%）が心不全により入院した。共変数の補正後、生殖可能期間と心不全発症とに負の相関関係がみられた（ハザード比：0.95/5 年）。初回妊娠年齢の若さと未産は年齢を補正した解析では心不全と有意な相関を示したが、多変量補正後には有意ではなかった。また、未産は完全補正モデルで左室駆出率保持不全心不全のリスクと関連していた（ハザード比：2.75）。

したがって、閉経後の女性において、初潮から閉経までの生殖可能期間が短いと心不全の発症リスクが高くなることが示された。この関連には内因性性ホルモンへの曝露が根底にあるのかについては今後解明していく必要がある。

出典：Journal of American College of Cardiology. 2017; 69(20): 2517-2526